

いずれの図書にもすべて、その読者を：慶應義塾における読書推進

さけみ かよ
酒見 佳世

(日吉メディアセンター)

1 はじめに

「いずれの図書にもすべて、その読者を」。言わずと知れたランガナタンの図書館学の五法則の一節である¹⁾。少々回り道になるが、まずは図書館が「読書」を推進することの意味を考えてみたい。

図書館の書庫はいずれも本で溢れている。しかしながら、その全ての資料が使われているわけではない。2010年のコーネル大学の調査では、1990年以降に出版された図書の55%が、更に2001年に出版された図書に絞ってみると2002年末の時点で80%、2005年末の時点で70%、2009年末の時点では65%が一度も貸出されていないという結果が報告されている²⁾。

日吉メディアセンター（以下、日吉）の場合、図書館システムがAlephに移行した2010年4月以降、2013年3月までの3年間の数字ではあるが、主要なコレクションである一般図書（請求記号がB、B0のもの）の62%³⁾は一度も貸出されていない。

書籍のデジタル化は進みつつあるが、現状では全ての出版物がいつでも必要な時に購入できるわけではない。このため図書館のコレクション構築は基本的にJust-In-Case方式⁴⁾で行われており、購入時にその図書が使われるかどうかを完全に予測することは難しい。貸出されずとも閲覧されているケースも考えられるし、その用途が学習か研究か、ということによってもその利用に対する評価の基準は変わるだろう。しかし、書庫狭溢化の現状と毎年の購入冊数のバランスを考え合わせると、蔵書貸出率はもう少し高くてもよいのではないか。良い図書館の尺度は様々あるが、単純な蔵書数や貸出冊数の多さではなく、用途にあった良質なコレクションとそれらを満遍なく多くの利用者に使ってもらえているかということが重要なのではないか。更には図書館が世の中に出回る大量の資料の中から、より良いものを選んで購入しているならば、その中に一度も使用されない資料があるということは、それらを読者に届けら

れない環境やサービスに問題があるとも言えるのではないだろうか。

2007年に日吉で始まった「読書推進」の目的は、学部1・2年生を対象に「本を手にするきっかけ（仕掛け）を作り、それによって学生に読書の楽しみを知ってもらい、図書館をより活発に使ってもらおう⁵⁾」ことであった。本稿では当初の「読書推進」から一歩踏み込んで、図書館の蔵書をその読者に届けるための「読書推進」という視点で他キャンパスを含めたメディアセンターの取り組みを紹介したい。

2 日吉の学生の図書館利用動向

読書を推進するにあたって、まずは学生の図書館の利用動向を知っておくことが重要である。そこで本稿では日吉キャンパスの学生の傾向を、データから読み解いてみたいと思う。

日吉キャンパスに属する学部生は文・経済・法・商・医・理工・薬学部の主に1～2年生（在籍期間は学部により異なる）、約1万人である。表1は学生毎の日吉図書館への入館率と日吉図書館所蔵資料の貸出率を割り出したものである。学生の入館率と貸出率についてはこの3年間、ほとんど変化は見られない。ほぼ全ての学生が入館しており、6割弱の学生が一度は資料を借りているという利用動向を示している。本を借りていない残り4割の学生については主にパソコンの利用のために入館しているものと考えられる。

日吉図書館所蔵資料の学部生への貸出件数の推移は表2の通りである（他キャンパスでの貸出は含まない）。こちらも年度の違いによる大きな変化は見られず、年間約13万件的貸出が続いている。2012年度の数字を見ると、一人あたりの平均は約25件となるが、最も多く本を借りた学生の貸出件数は421件とばらつきが大きい。貸出件数順に並べてちょうど真ん中の値である中央値は6件、大多数の学生の貸出件数を示す最頻値は1件である。このことから、一

表 1. 日吉キャンパスに在籍する学部生の入館率と貸出率

	日吉キャンパス在籍の 学部生総数	入館したことがある 学部生の数	入館率	貸出したことのある 学部生の数	貸出率
2010 年度	10,709	10,559	99%	6,324	59%
2011 年度	10,789	10,635	99%	6,290	58%
2012 年度	10,792	10,563	98%	6,120	57%

表 2. 日吉図書館所蔵資料の学部生への貸出
件数 (2010 年度～2012 年度)

	2010 年度	2011 年度	2012 年度
学部生への貸出件数	129,400	133,837	130,847

*他キャンパスでの貸出は含まない。

口に「貸出あり」とはいても、その読書量にはかなり個人差があることが分かる。

また、具体的にどのような本がよく読まれているのか、2012 年度の貸出件数を NDC の分類別にグラフにしたのが図 1 である。

目立つのは 830.7 や 837 などの英語学習書である。特に多読用の洋書がよく使われている。次に多いのは 913.6 の日本の小説で、形態としては文庫本の利用が多い。760 の音楽については、2011 年 4 月から音楽 CD の通常貸出を始めたことが影響している。その後には 933 の英米文学小説、331 の経済学、431 の物理化学などが続く。

続いて貸出件数を出版年別のグラフにしたものが図 2 である。

こちらはきれいなロングテールのグラフとなっており、新しいものほど良く使われていることが分かる。全利用の 8 割が 1996 年から 2013 年に出版された資料で占められている。

利用動向をデータから見る一方、カウンターで実際にやり取りをしている中で感じるのは、日吉の学生にとっては「図書館≒TSUTAYA」なのではないかということである。彼らにとって図書館の第一印象は良くも悪くも「無料」の TSUTAYA に近いのではないか。レポートの提出や試験が近づいて初めて図書館の使い方を知る学生も多い。レファレンスデスクに質問に来る学生もいるが、多くは効率よく単位をとることを最優先に考え、図書館の利用も限定的なものに留まり、そのまま専門課程へと進んでい

くものと思われる。また、これまでの読書推進の取り組みへの学生の反応を見ていると、彼らは実益のないものや興味のないことには反応が薄い、適切な「お薦め」があれば興味を持って行動する様子が見てとれる⁶⁾。

3 読書推進のための取り組み

それでは、これまでに各キャンパスでどのような読書推進の取り組みが行われてきたのだろうか。日吉の読書推進活動については既に報告されている⁹⁾ので、ここでは他キャンパスも含めた各メディアセンターにおける取り組みを概観する。

(1) お薦め本展示

日吉のほか、湘南藤沢メディアセンター（以下、湘南藤沢）、理工学メディアセンター（以下、理工）でも、教員や学生によるお薦め本の展示が行われている。日吉では 2008 年度から、教員お薦め本の展示を継続して行っている。また 2009 年度以降、学習相談員やその他の有志の学生によるお薦め本の展示も毎年行われている。

湘南藤沢では、過去数年に渡り教員のお薦め本を企画展示の一環として紹介している。2013 年度からは、「MMLS×メディアセンターフレンズ⁷⁾常設展」として、語学の参考書を実際に使用した学生（検定試験合格者や高得点取得者）のキャプション付きで紹介するなどの取り組みが行われている。

理工では 2010 年度から S-Circle⁸⁾による企画の一つとして、学生によるお薦め本の展示が行われている⁸⁾。2011 年度は研究室選びに迷ったり、専門分野の勉強法がわからなくて困ったりしている学部 3 年生を対象に、学部 4 年生以上の学生スタッフがお薦めの図書を学科別に紹介する展示などが行われた⁹⁾。

図書以外を対象にしたものとして、日吉では映画や電子ブックのお薦め展示なども行っている。これには図書館資料の幅広さを知ってもらい、それらの

〈特集〉 教員・学生との結び付き：メディアセンターの新たな取り組み

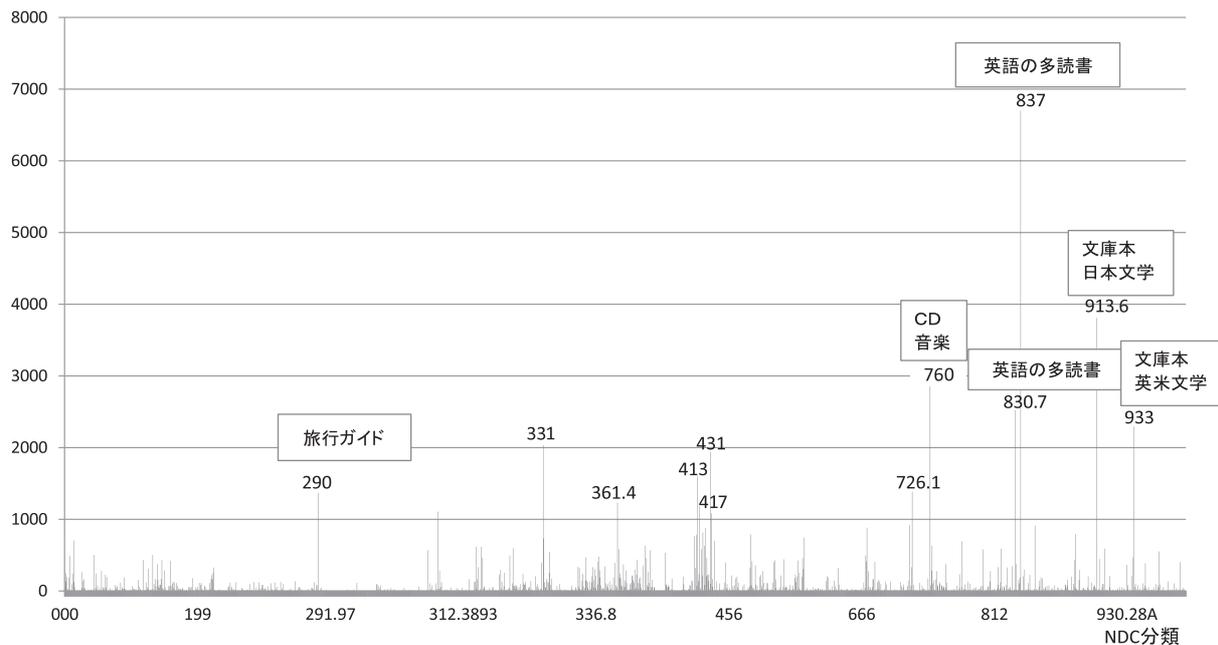


図 1. NDC 分類別に見た学部生への貸出件数

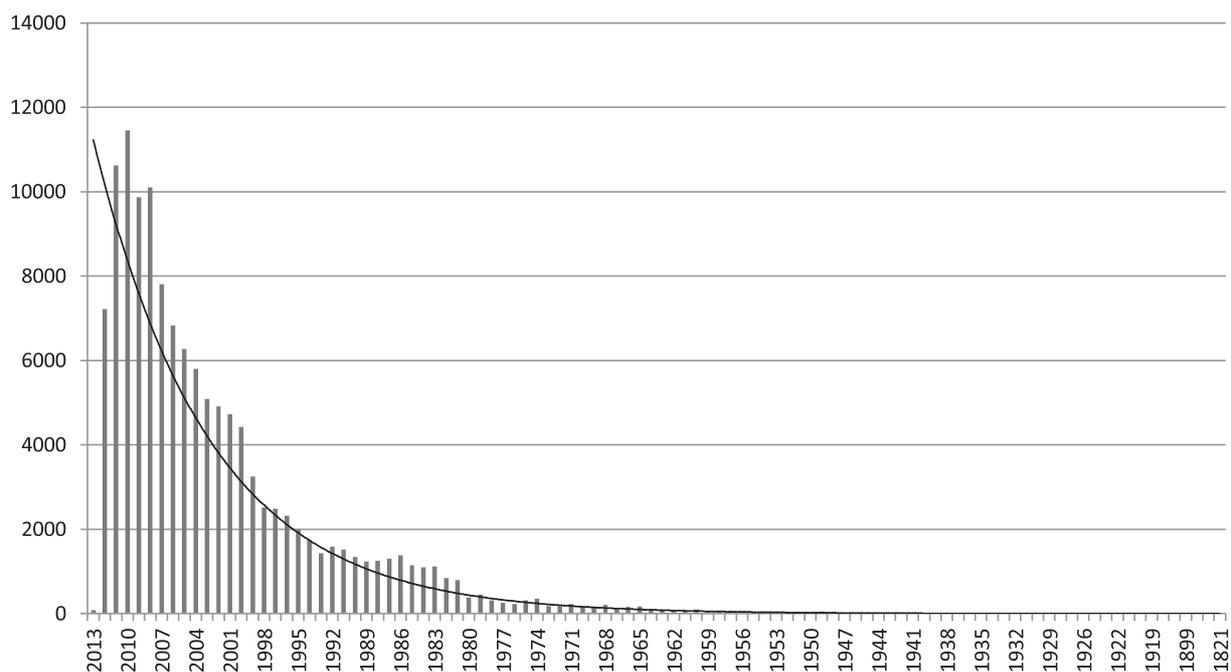


図 2. 出版年別に見た学部生への貸出件数

利用を促進したいという意図が込められている。

また、日吉では今年度新たに、特定のテーマごとに貸出ランキング形式でのお薦めを展示している。これまでに「レポートの書き方本」、「英語の学習書」、「小説」というテーマでランキングを紹介している。

(2) 学生による選書

通常、選書は図書館員あるいは教員によって行わ

れているが、利用者である学生自身に直接選書してもらう機会や仕組みを設ける取り組みもいくつか行われている。

a 選書ツアー

日吉では2010年から、湘南藤沢では2012年から「選書ツアー」が行われている。選書ツアーとは、図書館員が随行する形で学生自身が直接書店に出向い

て図書館に置きたい本を選ぶイベントである。今後、薬学メディアセンター（以下、薬学）でも行われる予定である。ツアーで選書した図書は一旦展示し、ツアーに参加しなかった学生にも広く利用してもらえるように配慮されている。本学の選書ツアーは紀伊國屋書店と丸善で実施されているが、今年度の新たな取り組みとして、日吉の選書ツアーを代官山の蔦屋書店で開催した。

b その他の選書

日吉ではラウンジに出版情報を設置しており、誰でも自由に選書できるようになっている。また、ピアサポートスタッフによる選書も実施しており、湘南藤沢ではライティング&リサーチコンサルタント¹⁰⁾による選書、理工ではS-Circleメンバーによる創想ライブラリーの選書が行われている。

(3) 講演会

日吉では2010年に本のソムリエ、清水克衛氏による講演会、2012年にはアカデミーヒルズ六本木ライブラリー・フェロー、澁川雅俊氏による図書館ブックトークを開催した。また湘南藤沢では2013年度の16ミリフィルム上映会で、テーマに沿った参考資料の紹介を行った。こういった講演会や上映会のような企画は学生の知的好奇心を直接刺激するという意味でも有効だろう。

(4) 情報発信

現在、新着図書リストのホームページでの公開は各メディアセンターで行われている。更に、湘南藤沢や信濃町ではTwitterを利用して新着図書の情報がツイートされている。湘南藤沢では「SFC CLIP」という学生団体が運営しているサイトでも新着図書情報のRSS配信が行われている。このほか、薬学では教科書・指定図書の情報を書誌レコードのタグとして付与しており、蔵書検索システム(KOSMOS)での検索、一括表示ができるようにしている。

(5) その他

学内連携による読書推進活動の一つとして、日吉では2010年から、慶應義塾生協学生委員会の主催で行われている「読書マラソン・コメント大賞慶應賞」の企画に協力している。コメントの募集や賞の選考に関わり、授賞式の開催をサポートしている。

4 これからの読書推進

学生に本を読んでもらうには、やはり授業やレ

ポート課題との連携、つまりは教員との協力関係を構築していく必要がある。情報リテラシーセミナーなどを通じてできた教員とのつながりを生かし、授業での課題やレポート、試験のために図書館に資料を探しに来る学生をうまく資料へとつなげる役割を果たすことは、読書を推進する力となる。

更に、授業や成績には直接結びつかない図書館ならではの彼らの知的な好奇心を刺激する企画を教員や学生と協力して行っていきたいと思っている。

将来的な理想形としては、蔵書検索システム上で個人個人の利用動向に合わせてオススメを提示できるもの、例えばAmazonの「この商品を買った人はこんな商品も買っています」のようなサービスを図書館の利用促進の視点から行うことも考えられる。展示、講演会などの場合、どうしてもその影響範囲が限定されてしまい、利用者全てに満遍なく、適切なお薦めをすることが難しい。また利用者の用途に合った資料を提示するためにも、主題や内容を示すデータ（目次データや件名など）の更なる充実が望まれる。すぐには難しい点も多いが、今後の課題として認識しておきたい。

5 終わりに

本と読者を結び付ける、広い意味での読書推進に必要なのは、授業や課題に直結する質の高い蔵書の構築、それらと利用者を結びつけるサービスやシステム、そして学生の知的好奇心を刺激する企画である。これまでの取り組みの中にも成果を上げているものがいくつかあるが、一担当者やワーキンググループの特別な努力というよりは、キャンパスの垣根を越えてメディアセンター全体の取り組みとして捉えなおすことが必要である。

参考文献・注

- 1) ランガナタン、図書館学の五法則、森耕一監訳、東京、日本図書館協会、1981、p. 425.
- 2) “Report of the Collection Development Executive Committee Task Force on Print Collection Usage”. Cornell University Library, 2010, http://staffweb.library.cornell.edu/system/files/CollectionUsageTF_ReportFinal11-22-10.pdf, (accessed 2013-07-20).
- 3) 2010年度～2012年度の貸出ログから、B, B0の通常貸出分を抽出し、ブックIDの重複を除去した件数を2013

年2月時点のB、B0の所蔵数で割って算出したもの。

- 4) Just-In-Case方式とは将来利用されるだろうという予測の元に資料を事前に購入すること。一方、Just-In-Time方式は実際に利用される時に初めて資料を購入すること。

Education Advisory Board. "I. Leveraging Digital Collections". Redefining the Academic Library: Managing the Migration to Digital Information Services. University Leadership Council, 2011, <http://utlibrarians.files.wordpress.com/2012/01/23634-eab-redefining-the-academic-library1.pdf>, (参照 2013-07-20).

- 5) 児島知子. 日吉メディアセンターの読書推進活動報告. MediaNet. 2010, no. 17, p. 68-71.
- 6) 例えば日吉で2013年1月から3月にかけて行った、学習相談員による映画の展示で選ばれた100本の利用は、展示以前に比べて増加した。展示後もお薦め映画の一覧をAVコーナーのカタログ棚に設置しており、リストの配布枚数は400枚を超えた。

【お薦め映画100本の利用実績】

2012年度全体：535/10330（5%）

2013年1月（展示期間中）：57/530（11%）

2013年2月（展示期間中）：33/257（13%）

2013年3月（展示期間中）：33/268（12%）

2013年4月：108/1253（9%）

2013年5月：107/1529（7%）

※数字は「お薦め映画の利用件数/総利用件数」である。

- 7) 長坂功, 渡慶次りさ, 木村優作, 金華斌. メディアセンターフレンズ. KEIO SFC REVIEW. 2013, no. 52, p. 18-21.
- 8) 向當麻衣子. 理工学メディアセンター S-Circle 活動報告：塾生による塾生のための相談窓口. MediaNet. 2010, no. 17, p. 72-73.
- 9) 向當麻衣子. 理工学式「学生協働」をさがして：S-Circleの2年目. MediaNet. 2011, no. 18, p. 44-45.
- 10) 天笠邦一, 直江健介, 笠井賢紀. ライティング&リサーチコンサルタントの実践と現在. MediaNet. 2012, no. 19, p. 44-47.